

近世琉球における王位継承について

——尚育王と尚泰王の即位を中心に——

はじめに

麻 生 伸 一

近世琉球（一六〇九～一八七九年）における新国王の就任には、日中からの承認が必要であった。琉球国王の王位継承プロセスを略記すると次の通りである。

まず、琉球国王が逝去すると、中城王子への王位継承を薩摩藩へ要請する。これを受けた薩摩藩は江戸幕府からの許可を得て、琉球側へその旨を傳達する。その後、即位儀礼が執り行われ、新国王は薩摩藩主へ起請文の提出を行い、謝礼のための使者を江戸へ派遣する（江戸立）。一方、中国側に対しては、国王の逝去報告を行い（報喪）、新国王の冊封が要請される（請封）。その後、琉球に派遣された冊封使によって「琉球国中山王」に叙任されることとなる。

以上のような王位継承プロセスを経ることから、王号（「琉球國王」「琉球國中山王」）の使用についても複雑な状況があったことが見て取れる。すなわち、琉球国王は冊封までは中国に対して「中山王」を自称することはできず

「琉球國中山王世子（世孫）」と名乗っており、厳格な王号使用が求められていた。他方、琉球国内、または日本との間では、中国側に秘匿しながらも冊封以前にすでに「琉球國王」号、「中山王」号を使用していた。

このように、琉球の王位継承やそれに伴う王号呼称の問題は対外関係と密接に結びついていたといえるが、中国側への請封の時期を決定するのは琉球側であること、幕藩制国家は王位継承に介入はすることはあっても、琉球側の推戴する人物を否定したことはなかったことから、琉球の王位継承権は一定の主体性も保持していた。⁽¹⁾

それでは外的な影響を受けながらも主体性を保持していた琉球国王の権威は、いかにして継承されていたのだろうか。これまで琉球国王の王位継承をめぐる外的要因・影響に関する分析は多く見られたが、国内における王位継承の詳細については検討の余地が残されている。

幸いなことに二〇〇九年に「尚家文書」（那覇市歴史博物館所蔵）が公開された。本史料群には、近世から近代にかけて豊富な情報が集積されており、王位継承に関する分析も可能となった。

そこで、国内外の状況を踏まえながら、王位と国王権威の継承の具体像について、尚灝王（一七八七～一八三四年）から尚育王（一八二三～四七年）への讓位、尚育王の逝去に伴う尚泰王（一八四三～一九〇一年）の即位を事例として検討したい。また、本稿では「尚家文書」に含まれる関連史料の分析を行いつつ、即位儀礼を中心に検討・考察する。儀礼を分析対象とすることで、国内における王位継承の有り様と、その理念を明らかにすることができると考えるからである。

第一章 尚育の即位と対外関係

第一節 尚育の即位許可まで

琉球国王となるうえで、いくつか踏まえるべき段階があるが、その一つが中城王子への就任である。中城王子はいわゆる「太子」⁽³⁾（世子）であり、次期国王と目される人物であった。近世期に王世子を中城王子と称するようになったのは乾隆一六（一七五二）年⁽⁴⁾であるため、当然ながら本稿が対象とする王国末期には世子と認識されていた。

〔表一〕道光七年の王位継承関係年表

月 日	事 項
五月一九日	尚育、中城王子襲職
七月一日	隠居要請使者の義村王子、薩摩到着
八月	薩摩、尚育を名代にと回答（隠居不許可）
九月一二日	義村王子、那覇帰着
十一月二日	元服儀礼日程決定
十一月七日	尚育、簪・冠（八巻）着用初日
十一月九日	隠居・相続の許可（於鹿児島）
十一月六日	御印御名決定（尚育）
十一月九日	尚育元服儀礼

* 『中城王子尚育様御元服日記』より作成。

近世琉球における王位継承について 麻生

側へ要請した。しかし、薩摩藩は以前、琉球国王の隠居を倦厭しており⁽⁵⁾、今回も、藩主が判断を考慮する間、尚瀬王は養生し、尚育は名代として政務を執るよう指示し、即決は避けている⁽⁶⁾。

ところが、およそ三ヶ月後、一転して隠居・相続の許可が出された。その許可状には、薩摩藩主である島津斉興の「思召」があり、隠居・相続を許可するので国中の仕置に念を入れよとある⁽⁷⁾。「表一」から分かるように、隠居の許可保留、許可の前後に尚育は中城王子へ就任し、また元服

を果たしている。中城王子が次期国王であったことを考慮すると、王子就任と元服は尚育が次期国王として正当性を得るための方法であり、薩摩側から許可を得るための手段であったと思われる。その意味で、王子就任と元服は王位継承のひとつの段階であったといえよう。

次に元服儀礼から王位継承の実態をみていきたい。尚育の元服諸儀礼を概観すると次の通りである。⁽⁸⁾

まず、尚育が元服し、地頭所と知行を拝領すること、元服後に着用する新たな簪と冠（八巻）を拝領すること、その製作を開始することの三件が、道光七年一月七日に言上され許可された。⁽⁹⁾ 同一九日には、元服儀礼が執り行われ、三司官の池城親方が理髪を担当し、「片髪」^{（かたかみ）}（歛髪）が結われ、同月二十四日に先王・先王妃への告祭が行われている。儀礼への参列者は限定されたが、参列しなかった者は、一月一九日以降、登城の上、尚育や尚瀬王、佐敷按司^{（しき）}（尚育生母）、野嵩按司^{（のだけ）}（尚育妃）などへ祝儀を述べており、各間切からは進上物が呈されている。

なお、「中城王子様御元服并御地頭所・御知行高御拜領御日」⁽¹⁰⁾とあるように、一月一九日は中城間切を地頭所とし、知行を拝領する日でもあった。中城王子への就任を機に領地や知行を拝領したのではなく、元服を機に拝領したのである。告祭では、先王および先王妃に対して祝文が捧げられ⁽¹¹⁾が、そのなかに「擇びて五月十九日において長子育を立てて世子と爲す」⁽¹²⁾とある。尚育が元服時に世子となったことが表明されている。さらに、元服時には「中城王子様、太子様被爲成候付、圓覺寺・天王寺御神位様江來廿四日三司官御使を以御告祭可有御座事」⁽¹³⁾という認識が王府官僚層に共有されていた。尚育の場合、中城王子への就任時に世子となっていたが、その表明は元服時であったことを確認しておきたい。

二五日には尚育自身が三ヶ寺（円覚寺・天王寺・天界寺）を参詣する規式が催された。詳細は不明なためここでは省略するが、おそらく尚育本人が三ヶ寺を廻り、自身の元服を表明したものである。

なお、中城王子は鹿兒島へ上国し薩摩藩主と面会する必要があった。これも次期国王となる儀礼のひとつで、薩摩藩は、自らの威光を琉球側に示し、薩摩との関係を再認識させる儀礼と認識していた。⁽¹⁴⁾ 尚育の場合、中城王子就任から即位までの期間が短かったため上国はなかったが、それ以前にも尚敬（一七〇〇～五二年）、尚穆（一七三九～九四年）は幼年に即位したため、続く尚温（一七八四～一八〇二年）、尚成（一八〇〇～一八〇三年）、尚灝も上国を待たず即位したため上国しなかった。さらに、尚育長男の尚濬（早世）、尚泰も免除された。⁽¹⁵⁾ 中城王子上国の意義は琉薩ともに共有していたが、その必然性は低下していたのである。⁽¹⁶⁾

第二節 清朝対策

ところで、王府では薩摩側から許可される前後に清朝側へ尚灝の隠居を報告すべきかを検討していた。

はじめに王府行政の中枢機関である表十五人衆は、清朝へ送る公文書作成や通訳、暦官などを職掌とした久米村^{くめむら}方にその案件を検討させている。⁽¹⁷⁾ 久米村方からは二つの見解が提示され、その報告を受けた表十五人衆は、討議を加え、結論として清側への報告・要請はしない方針が推奨されると摂政・三司官に報告した。その理由は次の通りである。⁽¹⁹⁾

第一に、中国では天子が隠居、あるいは病氣により世子を名代とすることはあるが、「諸侯」にはその例がない

近世琉球における王位継承について

麻生

第九十五卷

三八七

こと。また、「諸外国」も隠居の先例はあるだろうが、「諸侯之分格」に従い清朝へは報告しなかったため記録は残っていないことである。各国・諸侯の対応に基づくべきであるとの意見である。

第二に、前例にない摂位を要請すると、検討事案となるはずで、場合によっては勅許が下されて冊封（領封）が命じられることが憂慮されること、あるいは隠居・相統の報告が請封と解釈され、領封となる恐れがあることである。すなわち領封を回避するために報告すべきではないとの意見である。

領封とは、中山王任命の勅書を北京や福州などで手交するもので、それまでの皇帝の使者（冊封使）を琉球に派遣して勅書を下す領封とは異なる任命方法である。²⁰琉球は薩摩藩を牽制するためにも領封に固執しており、清朝との関係が希薄となったと印象づける領封は避けなければならなかった。²¹

第三に、尚灝はいまだ壮年であったため、政務を厭っているから摂位を要請したと判断された場合、問題となる恐れがあることである。清朝との外交摩擦を回避するという目的が根拠となっている。

さらに、これまで通り尚灝の名義で表文・奏本を提出しても清朝側は不審がることもないだろうとし、もし隠居が露見し、清朝の官人衆に追及されたとしても、尚灝の病気を理由に摂位したと弁明すると良いとも述べている。

隠居・相統が発覚したことも想定した上で、報告しないとの案が提示され、道光八（一八二八）年の讓位を摂位と言ひ換えることで、清朝との外交問題を回避しようとした。

以上のように、琉球の王位継承は清朝へ義務的に、あるいは無自覚に要請・報告していたのではなく、外交戦略の様相を呈していたといえる。さらに、近世日本との関係が清朝との関係には必ずしも影響しないとする結論を得

たことも興味深い。日本関係では尚育王、清朝関係では尚灝王という外交上の齟齬を避けるのではなく、清朝と問題とならない方策が企図されたことは、対日外交政策と対清外交政策を必ずしも一致させないことが琉球の外交戦略のひとつであったことを示す。⁽²²⁾

第三節 尚育の三度の「即位」と史料編纂

このような琉球の外交スタンスは、史書にも反映された。すなわち、尚育は三度王位に就いたとされているのである〔表二〕。

一度目は道光八年である。この王位継承に関して『中山世譜』（以下、『世譜』と略記する）では尚灝王が病気のため、世子尚育が「攝位」したとあり、⁽²³⁾『中山世譜』附卷（以下、『附卷』と略記する）では尚灝王が「歸政」したため、

〔表二〕『中山世譜』の尚灝の隠居と尚育の即位時期

	『中山世譜』		『中山世譜』附卷	
	尚灝	尚育	尚灝	尚育
道光七（一八二七）年	—	称中城王子	稟報歸政	—
道光八（一八二八）年	染病	攝位	歸政	即位
道光一四（一八三四）年	薨	—	薨	—
道光一五（一八三五）年	—	即位	—	—
道光一八（一八三八）年	—	為中山王	—	—

*『中山世譜』、『中山世譜』附卷より作成。

世子尚育が「即位」したとある。⁽²⁴⁾尚灝から尚育へと政治権力の主体が移行したことは同じだが、「攝位」と「即位」では王位を継承したかについての解釈が異なる。

二度目は道光一五（一八三五）年である。ここで『世譜』は、同一四年の尚灝の死亡と翌年の尚育の「即位」を記載するが、⁽²⁵⁾『附卷』は尚灝の死亡のみを

記載している。

三度目の王位継承である道光一八（一八三八）年について『世譜』は「中山王と爲る」として⁽²⁶⁾いる。「中山王と爲る」とは清朝から冊封を受けたことを指す。「即位」と冊封を区別して理解していたことに注意したい。⁽²⁷⁾

このように『世譜』と『附卷』とは尙育が「王」となる時期が異なっていた。すなわち、『世譜』は道光八年に尙育が王位を代行し⁽²⁸⁾、同一五年に即位し、同一八年の冊封によって「中山王」となったとする。一方、『附卷』は道光八年に即位して「中山王」を自称しながらも、道光一八年に冊封を受けたとする。また、『球陽』⁽²⁹⁾も、「此の年（道光八年）、世子尙育、位を攝す」⁽³⁰⁾、「（尙育王）即位元年 大清道光拾五年乙未」⁽³¹⁾、あるいは「（道光一八年）本年五月、冊封欽命正副使、本國に按臨す」⁽³²⁾とあるように『世譜』の編集方針が踏襲されている。道光八年の記述に象徴されるように、清朝への表明内容に留意した『世譜』と『球陽』、日本との関係も考慮した『附卷』という構図が見えてこよう。⁽³³⁾

この背景には、尚灝の隠居をあえて清朝へは報告せず、露見した場合には「攝位」と説明しようとした琉球側の姿勢があった。しかし、明治頃に編纂された薩摩側の史料には「（文政）十一年（略）是歲尙灝位ヲ世子ニ讓ル（略）薩藩記録書按スルニ舊例國王ノ繼承必ス卒後ニ至リテ之ヲ清國ニ報ス」、「中山世譜・球陽等ノ書ハ清國申報ヲ以テ主トス、故ニ讓位ノ事ヲ載セス」⁽³⁴⁾とある。一連の状況を同時期の薩摩がいかに理解したかは不明だが、この史料から薩摩側は、報告時期のみを問題としているように思われる。「即位」「攝位」を使い分けた背景に領封・頒封問題があったこと、それは清朝対策であったとともに日本対策でもあったことについて薩摩側は認知していないことが

分かる。いずれにせよ、あくまで尚瀬が存命中には尚育は即位しないことが「諸侯之分格」であるとする琉球の政治的判断がそのまま史書の記載に繋がったのである。

第四節 国内における即位時期の認識

「今（三）月十八日午之刻被遊御即位候事⁽³⁵⁾」と琉球国内に通知されたように、尚育の即位日は道光八年三月一日正午頃である。少なくとも、この日時をもつて尚育は「即位」したと国内では認識されていた。

しかし、即位儀礼の前日、円覚寺と天王寺で行われた先王・先王妃への告祭では、「育、謹んで擇びて本月十有八日良辰において祇みて慈命を承け、勉めて王が職を攝す⁽³⁶⁾」という告文が呈されており、三月一八日の即位儀礼当日にも、「攝位の命を受け、権^かりに國事を管することを慶賀す⁽³⁷⁾」という一文の付された祝文が読み上げられた。尚瀬が存命中であったことが要因であろうが、三月一八日は、先王等に対しては「攝位」の日としていたのである。道光八年の王位継承には、即位と摂位という両義的な意味があったものと思われる。

このような記載の混乱は士族の家譜にも現れる。家譜には功績や業績、職歴などを列記する箇所があり、それは王代によって分記されている。沖縄島の士族（首里、那覇、久米村、泊村）の家譜に拠ると「尚育王代」はほぼ道光一五年から開始されており、前国王（尚瀬）⁽³⁸⁾の死去を契機として尚育王代の開始とみなしている⁽³⁹⁾。

ところが、両先島（宮古島・八重山島）の士族の家譜の場合は、道光八年を契機とするものがほとんどである⁽⁴⁰⁾。家譜からいえば、沖縄島の士族は尚瀬王の死去に伴う尚育王の即位を、宮古・八重山の士族は摂位をもつて尚育王代

と認識していたのである。

この差異は、国王との主従関係の刷新（更新）の時期をいかに捉えていたのかという問題に関わる。家譜の唐人への披見は基本的には禁止されていたので、琉清関係に配慮した制約はないと思われる一方で、家譜の作成は王府機関の系図座が管轄していたため一概にはいえないが、一連の家譜にみる王代意識は、士族層がいかに主従関係や王位継承を理解していたかを推察する指標となろう。家譜は公文書という性格を持っていた反面、地域ごとの統一性はとられていなかったことや沖縄島の士族と両先島の士族とは国王との主従関係成立の機を異なつて捉えていた可能性があることを考察する必要がある。

このように尚育の「即位」はさまざまに解釈され、さまざまに記録されていた。前例のない隠居に伴う王位継承であったことがその背景にあるが、それに加えて琉球を取り巻く対外関係や琉球国内における主従関係の認識の差異も影響していたといえる。

第二章 尚育・尚泰の即位儀礼

第一節 即位諸儀礼の全体像と使者帰国に伴う儀礼

以上の経緯から尚育は道光八年に国内向け、日本向けには王位を継ぐこととなり、即位に伴う諸儀礼が催されることとなった。つづいて、道光八年の即位に着目して尚育の即位を考えてみたい。まずは『尚育様御即位日記』に沿って一連の儀礼を即位諸儀礼としてまとめてみる。⁽⁴³⁾ 道光八年に挙行された儀礼は次の通りである。

育①：使者帰国に伴う儀礼（道光八年一月二九日）

育②：許可書お披露目儀礼（同年二月二七日）

育③：即位儀礼（同年三月一八日）

育①は与那原親方（よなばる）（44）の那覇への帰港後すぐに行われた。参加者は、使者の与那原をはじめとして、王子衆・三司官（池城親方・座喜味親方（ざきみ））・御物奉行・申口・吟味役などであった。摂政の羽地王子は病気のため不参加で、主役の中城王子尚育も不快を理由に出座しなかった。さらに、尚瀬王の参加も予定されていなかった。そのため参加者は、上級役人と使者、および彼らの側近のみであった。

式次第は次の通りである。まず、与那原親方が与力を伴い登城し、尚育にご機嫌伺いを行う。その後、薩摩藩家老から出された「御家老衆より之御連札（ごしんせき）」（相続許可状）が内々に尚育に提出され、参加者が尚瀬王・佐敷按司・汀間按司・尚育に祝儀を申し上げる。

その後、儀礼の場所は御書院へと移される。尚育は「不快」のため参加しなかったが、与那原親方などが御書院に参上し、お振る舞いが供された。それが終わると与那原は退去、続いて御書院奉行などが参上し、王子衆・三司官を迎え入れ二度目の饗食が行われた。このように、育①は使者を労い、高官と情報を共有するものであった。なお、尚育へ「内々」に許可状が披見されたことに注意したい。

第二節 許可書のお披露目儀礼

育②は薩摩から到来した相統許可状の披露儀礼である。まず、与那原親方が登城すると御書院で控えていた摂政以下の役人が出迎える。その後、与那原到着が尚育に注進され、与那原は御番所で待つ。摂政以下の役人が南風之御殿（南殿）に入り、三司官の要請を受けた尚育は南殿の御勝手から出御し、役人は「御禮」⁽⁴⁶⁾をして迎える。

尚育の出座に続いて、「御口上書」（相統申請書）や相統許可状を納めた蒔絵文箱が漆塗りの台に載せられ尚育の前まで運ばれる。運ぶのは与那原の与力で、与那原は文箱のうしろに控える。文箱から出された御口上書は御前で開けられ、尚育が自ら取り出し拝見したあと三司官に渡された。三司官から御右筆主取に渡された許可状は御勝手から出される。与那原は尚育に「御禮」をして着座する。

このように育②は使者の帰国、登城を再現する儀礼であった。また、許可状が薩摩からもたらされたことを役人層に視覚的に周知させるものでもあったと考えられ、「内々」ではなく公式に行われたものであった。

尚育への「御口上書」などの披露が済むと、尚育から参加者、与那原および与那原の与力へ酒などが振る舞われた。その後、尚育が入御し、王子衆・御書院奉行以下役々から尚育へ祝儀が申し出された。

次に儀礼の場は御書院に移される。まずは御書院奉行と御書院当などが伺候する。その後、尚育が出御し奉行などが出仕、続いて王子衆・三司官（与那原含む）・御物奉行・申口・吟味役が出座する。その後、饗応が行われ、それが終わると尚育が入御する。

育②の終盤には、隠居・相続が許可されたことを那覇在駐の薩摩役人である在番奉行へ報告する。使者は三司官

の座喜味親方が勤め、報告後は奉行所内で吸物や酒が振る舞われた。形式上、在番奉行は本国から国王の隠居・相続の情報を入手するのではなく、あくまで王府側から伝えられていたこととなる。

このように尚育が参加したこと、在番奉行を巻き込んでいたことからも育②は、育①と比べ大規模であったことが窺われる。また、事前に尚瀬王の隠居と尚育への譲位の情報は諸役人へ通達されていたが、⁽⁴⁷⁾尚育自身が「御口上書」などを閲覧する育②の持つ意味は大きかったといえる。

また、育②に不参加の王子衆や諸役人は、二月二十八日から三月一日の間に朝衣冠（正装）を着用して登城⁽⁴⁸⁾し、尚育および佐敷按司・汀間按司へ祝儀を述べるように指示されている。対象者は首里・那覇・久米村・泊村の諸士族をはじめとして按司衆、王子衆、首里城勤務の諸役人、前任の三司官など多岐に亘る。⁽⁴⁹⁾育②はあくまで許可状の披露、およびそれに関する祝儀であるが、沖縄島の士族層は儀礼後に登城して新国王の就任が許可されたことを祝賀するのである。琉球の役人にとって育②は新国王の即位を意識・体感する場となっていたと思われる。

第三節 即位儀礼

三月一日には育③が執り行われた。参加者は多岐に及ぶが、役人などでは上級役人の王子衆、按司衆、三司官、三司官座敷、親方衆をはじめ、首里城詰めの役人である御物奉行、申口、吟味役をはじめ、士族層である「首里・那覇・久米村申口座以下士之筑登之座敷迄并花當・小赤頭・親見世若筆者・久米村若秀才」、「御城御番并御規式携候神哥親雲上御書院下代迄」や、「田舎より者座敷并さはくり三人宛」といった地方の百姓身分の者も呼ばれてい

近世琉球における王位継承について

麻生

第九十五卷

三九五

た。⁽⁵⁰⁾ 首里など都市部の士族の場合、二月一〇日までに参加人数の名簿を提出したが、田舎住まいの者や忌み日などの理由で登城できない者については注記するよう指示されており、⁽⁵¹⁾ 士族層は基本的に全員参加が求められていた。また、公務などで首里や那覇に滞在していた離島の士族などの出席も求められている。

王族では「御姉妹部并同座敷、女按司、御外戚御從御伯叔母迄、男幼少之方右同斷、御由緒方」が参加した。⁽⁵²⁾ この他、女性では三司官の室、聞得大君御殿の「脇付」(下級の女官、三平等の「大あむしられ」や「掟之あむ」、楚辺・泉崎などの「大あむ」、久米村の「西・東之大あむ」などの役人の妻や神女、佐敷御殿や汀間御殿など諸御殿の女性役人や尚瀬の乳母なども参加が命じられている。

即位当日の儀礼は、位階昇進役人による国王への御拝、国王が北殿近くに設置された焼香台から北面に対して焼香し、唱拝などを行う朝之御拝、正殿二階の御差床に出御した尚育に対して御拝する唐玻豊向之御規式、諸役人などによる御花・御酒の献上、尚育が正殿一階の下庫理に出御して御酒・御茶を振る舞う三御飭之御規式、御書院などでの饗応という次第であった。⁽⁵³⁾

王子や諸間切・諸島などからの献上について、はじめに御花・御酒・御甕酒の目録が提出され尚育が上覧したあと、献上者による四つ御拝が行われ、献上された酒壺や甕は御庭の両側に並べられた。献上物は事前に指示があり、王子・按司衆、三司官以下首里城勤務者、那覇・久米村士族、諸間切・諸島役人それぞれ計四種が提出された。目録の書式や紙は元日の献上と同様にするよう指示され、献上された酒壺や甕は御庭の両側に並べられた。⁽⁵⁴⁾

最後に行われた饗応は身分や役職によって振る舞われる場所が異なっており、按司・親方や首里城勤務者(吟味

役まで)や那覇里主など首里士族は南殿、申口座以下の首里城勤務者の下級役と久米村士族の正議大夫や長史、那覇士族の御物城、泊士族の泊頭取は御番所の上御座、それ以外の久米村方の中議大夫や首里・那覇の中下級士族は北殿、間切役人や下層の首里城勤務役人は君誇が設定されている。⁽⁵⁵⁾

第四節 尚泰の即位儀礼

次に尚泰の即位関係儀礼について取り上げてみたい。大まかな流れは尚育と類似しているので、ここでは簡略に記すこととする。諸儀礼の日程は次の通りである。

泰①：使者帰国に伴う儀礼（道光二八年四月九～一〇日）

泰②：許可書お披露目儀礼（道光二八年四月二七日）

泰③：即位儀礼（道光二八年五月八日）

道光二七（一八四七）年九月一七日、即位要請の使者に摩文仁按司が任じられ、その後、薩摩藩に派遣された。

琉球側では、許可されることを見越して式次第の確認など着々と準備が進められていたが、四月九日には至急便で許可されたとの情報が那覇にもたらされ、翌一〇日には、使者の摩文仁が帰国した。育①に相当する儀礼（泰①）は、九、一〇日両日に執り行われたが、薩摩藩での疱瘡流行を受け、使者は那覇にとどまることとなり、「御使者持下候御家老衆より之御連札」（許可状）も筆写して尚泰に披見している。育①では使者が登城することに意義があったが、泰①では使者の登城は見送られた。⁽⁵⁷⁾

育②に当たる儀礼は、四月二七日に執り行われた。参加者は、摂政、三司官、御書院奉行、御物奉行、申口、吟味役、王子衆、御書院当、御右筆主取で、育②と同様、許可状を持ち帰った使者（摩文仁按司）を出迎え、許可状を尚泰へ披露し、使者とともに饗食するという流れであった。育②と異なるのは、場所が中城御殿であったことである。尚育は即位前、名代として首里城で執政していたことから首里城で儀礼を行ったが、本来は中城御殿で行う儀礼であったのだろう。

泰③は即位儀礼である。参加者は、王族、由緒方をはじめ、三司官など諸役人（首里城をはじめとする諸座・諸御蔵勤務者）、地方役人（沖縄島及び周辺離島）、久米島・硫黄島・両先島といった島々の役人で首里・那覇に滞在中の者、女官、神女、神社や寺院の太夫・祝部・禪家・聖家などであった。育③との大きな違いは、国王の中城御殿から首里城への移動があることである。育③では首里城に政務の場を移す儀礼がなかったが、尚泰の即位儀礼（泰③）においてこの移住は、士族や百姓に視覚的に新国王の即位を披露する重要な意味を持っていたと思われる。

尚泰の登城に当たっては、迎えの王子や按司、三司官らが中城御殿へ赴き、「疏装束^{りゅうしょうそく}」を着用した尚泰が行列で首里城に向かった。朝六つ時に登城した参加者が首里城内それぞれ指示された場所で待つなか、四つ時に路次楽などの行列を伴い尚泰が登城する。尚泰入城後は、基本的に育③と同様で、位階昇進役人による御拝、朝之御拝、唐玻豊向之規式、諸役人からの献上、三御饗之御規式、饗応とともに、子^ね之^{ほう}方^{おき}御^{しき}規^き式（北方遙拝儀礼）も行われた。

以上、国王即位までの経緯を見てきた。育③、泰③という即位儀礼そのものは設定されていたものの、琉球側としては、許可状の到来から即位までの一連の儀礼を通して、新国王の即位を国内に認知させようとしていたと思わ

れる。それは、『尚育様御即位日記』、『尚泰様御即位日記』という表題の史料にこれらの儀礼の準備や内容が記載されていることから確認される。

なお、薩摩からの許可状の披露が即位儀礼に組み込まれていた点からいえば、薩摩藩は琉球国王の王位を保証する存在と見なされていたといえる。しかし、それをもって近世日本が琉球国王の選択権に介入していたとみなすことはできない。薩摩藩は尚瀨の隠居に慎重ではあったが、薩摩側の意向で次期国王が決定されたわけではないことは第一章でみてきた通りである。薩摩からの追認を受けざるを得ないという面で、琉球の王位継承は近世日本の影響を受けていたといえるが、基本的に薩摩藩は琉球側の推戴する国王を追認するのみであったし、次期国王となる中城王子の就任にはほとんど関与しなかった。

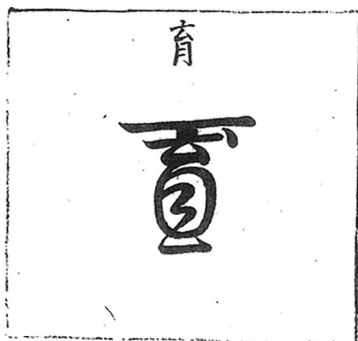
琉球の国王権威が近世日本の権力・権威にどこまで影響を受けていたかについては慎重に判断しなければならぬが、少なくとも薩摩藩の許可状披露儀礼が国王即位儀礼に組み込まれていたことを確認しておきたい。

第三章 王位継承の諸段階

それでは、国内向けに王位継承を意味づけていたのはどのような事項・事象であったか、実際に国王としての権威性を継承するために求められたことは何かについて、国王権威の継承の諸段階という視点からいくつかのトピックスを挙げて考えてみたい。



図一 中和(『尚育様御元服日記』より)



図二 育(『尚育様御元服日記』より)

第一節 唐名と「上様」呼称

はじめに注目するのは唐名である。国王にはいくつかの名前があったが、そのなかで神名に関しては古琉球から近世初期の尚豊までの国王に付されていたことが指摘されている⁽⁵⁸⁾。また、国王は他の士族と異なりいわゆる名乗りがなかったため、尚豊の息子である尚賢以降は童名以外には唐名しか個人を識別する呼称はなかった。一方で、外交関係を行う上で国王には唐名が必要であったため、唐名の決定は王位継承のひとつの段階とみることができる。ここでは、唐名を決定する時期とその経緯について取り上げてみたい。

尚育の場合、中城王子への就任時に「唐御名」、すなわち「育」が付けられた。元服儀礼に先立つ道光七年十一月に「御印」が作成されたが、その際、本来「唐御名」は元服時に決定されるが、尚育はすでに五月の段階で決められたと注記されている⁽⁵⁹⁾。なお、「御印」とは国王印のひとつで、久米村方の役人が考案したものである。尚育の場合、「中和」(図一)、「育」(花押、図二)が作成された。

このように元服時に唐名を付けたと思われるが、外交文書などに唐名を記す必要があったことから、幼年にて即位した尚泰は、尚育の死後(道光二七

年九月一七日死去）、道光二八年正月八日の即位を機に決定された⁽⁶⁰⁾。国王の場合、唐名を付けることは成人の表象を意味するとともに、外交の舞台へ立つ要件でもあったのである。

ところで、育^②が行われた二月二七日には「上様被遊御隱居候付、國中二而者、太上様与奉稱候様被仰付被下度旨、御書院當阿波根里之子親雲上御取次、達上聞相濟候事⁽⁶¹⁾」との廻文が出された。琉球国中に行き渡るには時間がかかったと思われるが、この日より尚灝は「上様」から「太上様」と称されることとなったのである。この変更に伴い、二月二八日には尚育も「中城王子様」から「上様」となっている⁽⁶²⁾。称号の面からは、育^②を境にして国王が入れ替わったことを示す。

尚泰の場合は、唐名の決定後も泰^③までは「中城王子様」と呼称するよう指示されていたが、厳密に守られていたわけではなく、即位前の「上様」使用が散見される⁽⁶⁴⁾。尚育と異なり、「上様」が二人いることによる混乱は想定されないためこのような事態になったと思われる。

第二節 衣裳と行動制限

次に服装などをみていきたいが、尚育については関係史料の残存が少ないことからここでは主に尚泰の事例を中心に取り上げる。

尚泰の即位にあたり国王の表象ともいえる「龍御簪」については、泰^②までに制作するよう指示され⁽⁶⁵⁾、三月二六日に完成すると尚泰へ呈された⁽⁶⁶⁾。尚育の際には、元服から即位までの期間が短かいことを理由に簪の新造を見合わ

せている。⁽⁶⁷⁾

また、尚泰の服装について、とりわけ「唐御冠服」を着用すべきかをめぐっては表十五人衆が久米村方などに諮問している。対して久米村方は、即位に当たって冠服を準備し琉装束の時には大帯を着用しなければならないこと、「子之方御規式」では冠服を着用しなければならないことを前提としながらも、数え六歳の尚泰が儀礼に参列することは難しいので、名代を立てるべきであると回答している。一方で、豊平親方^{とよへい}らは、年齢を考慮し冠服の着用は控え、琉装束で「子之方御規式」も勤めるべきであるとした。

これらを受け、表十五人は、尚穆（数え一三才で即位）、尚温（数え一一才で即位）が冠服、大帯を着用した前例をひきながらも、久米村方の意見を採用し、諸儀礼はしばらく名代が行い、衣裳についても大帯のみ準備すべきとの結論を出している。この提案は、四月一四日に三司官から尚泰に上申され、結果として冠服とともに大帯の着用もしばし控えることが決定された。⁽⁶⁸⁾

このように、衣裳の調製に関して、王府役人は尚泰の行動制限についても言及している。すなわち、「子之方御規式」について、尚泰自身が執り行うべきか、あるいは名代を立てるべきかというもので、これは名代を立てるならば冠服を仕立てる必要がないとの判断に基づく。⁽⁶⁹⁾ 結果、名代を三司官が勤めることとなり、尚泰の服装も琉装束とされたが、衣裳着用問題は、国王の行動制限と密接に結びついていたといえる。⁽⁷⁰⁾

尚泰の行動制限について、即位までの間は在番奉行所への年頭使や節供の使者派遣を停止すること、端午の儀礼を中止することなども見られる。⁽⁷¹⁾ 即位までは尚泰の表立った行動は控えるというもので、即位をより効果的に演出

するための方法であつたと思われる。

尚育の場合、行動制限はより顕著に見られた。具体的には「御即位之當日」、すなわち育③では「子之方御規式」を行わないこと、崇元寺^{（さうげんじ）}への参拝と孔子廟への告祭を延期とすることなどである。また、崇元寺への参拝、孔子廟への告祭とともに、「辨財天堂・觀音堂并御宮・嶽々、又者邊戸・今歸仁・知念・玉城・伊平屋島」への「御立願」、「護國寺三十座」における「御祈念」も延期されている。その理由は、「御先例」とは異なるからであるとしているように、前王が存命中であつたことが大きな理由であつた。

第三節 告祭と願文

尚泰即位に關しての告祭、立願、参拝は次の通りであつた。

即位儀礼前日の五月七日には、円覺寺、天王寺に三司官代参にて告祭が執り行われ、祝文が捧げられ、五月八日に「即位」することが表明され国家の安定を祈念して^{（74）}いる。

即位後、五月一三日に三ヶ寺（円覺寺、天王寺、天界寺）、一五日に崇元寺、一八日に弁財天、千手觀音、そのひやん御嶽、弁之御嶽、七社（波之上權現、沖權現、識名權現、末吉權現、普天間權現、天久權現、八幡權現）などで告祭、立願、参拝がすべて代参で行われた。同日、琉球各地の御嶽（辺戸四御前、今帰仁四御前、知念四御前、さやは御前、久高九御前、玉城六御前、伊平屋島二三御前^{（75）}）に対しても、親方以下士族層を派遣して御願書と御花包みを捧げさせている^{（76）}。これらは尚泰の即位を報告するという意味があつた。御願書は次の通りである。

近世琉球における王位継承について

麻生

第九十五卷

四〇三

今度尚泰王かなしりあかりめしよわちやるけに十百と十百さちやうあるやう思こわ御すてもの、十百すへの御かふう嶋國の作物のため唐・大和・宮古・八重山島々の船々うわつきや、とのふ事も百かふうのあるやに御守めしよわち御たかひめしわれて、御たかへおかミ申御祝物、⁽¹⁷⁾

以下、御花包み（供物）の一覧が続くが、要するにこの御願書では、尚泰の即位に際し、国王の長寿と王族の息災、五穀豊穰、唐・大和・宮古・八重山を往還する船舶の航海安全などが祈願されている。内容は、百人御物参り⁽¹⁸⁾と酷似しており、即位ならではの願文ではないが、各地に王府官僚を派遣することで、新国王の即位を各地で印象づけていたと思われる。

以上のことから、衣裳の製作とともに儀礼時の参加手段、宗教施設での告祭などが、王位継承に不可分に組み込まれたものであったことが確認できる。表舞台に登場する時期を調整し、登場の際の衣裳を考慮し、名代で仏神などに祈願、報告することは、効果的に新王の登場を演出し、即位を士族や百姓に印象づけ、また儀礼に幅広く参与させることによって自己と王との結びつきをも確認させていたのである。

おわりに

以上、尚瀬から尚育、尚育から尚泰へ王位が継承される状況に迫ってみた。即位および王位継承に関わる諸儀礼や周辺の問題についていくらか明らかになったと思われるが、とくに確認したいのは、国王権威が収斂していく状況である。育^③、泰^③は即位儀礼であるため王位継承の重要な日ではあったが、この日をもって即位としていたの

ではない。前後に行われた諸儀礼（許可状のお披露目儀礼や、告祭など関係儀礼）も王位継承を補完していたといえる。また、「上様」呼称や衣裳、行動制限などによって国王の権威・権力は段階的に引き継がれていくのである。

今後の課題は次の通りである。まず、中城王子就任の持つ意味について考えることである。これまでは、中城王子への就任が次期国王となることを示していると理解されていたが、本稿で明らかになったように、中城王子への就任とともに、元服を経ることも「世子」に認定される要件であった。元服や中城王子への就任の意義を掘り下げる必要がある。

また、冊封儀礼を経て「中山王」となることの意味についても分析することが求められる。冊封が琉球王権に付与したものは何か、王府役人や薩摩藩にとって冊封の意義とはなんであったかなど、王位継承について視点を広げて考える必要がある。

註

(1) 菊山正明「琉球王国の法的・政治的地位——幕藩体制との関連において——」〔沖繩歴史研究〕一一号、一九七四年、豊見山和行「従属的二重朝貢国Ⅱ琉球の対外関係と貢納制」〔琉球王国の外交と王権〕吉川弘文館、二〇〇四年、二六八―二六九頁、初出は二〇〇〇年。

(2) 上原兼善「幕藩制国家の成立と東アジア世界——琉球・明国・朝鮮国の動向を中心に——」〔地方史研究〕一

九七号、地方史研究協議会、一九八五年）、豊見山和行

「冊封関係からみた近世琉球の外交と社会」〔琉球王国の外交と王権〕所収、初出は一九八八年、同「近世初期の対薩摩外交」〔同上、初出は一九九六年〕、前掲註（1）豊見山和行「従属的二重朝貢国Ⅱ琉球の対外関係と貢納制」、前掲註（1）菊山正明「琉球王国の法的・政治的地位」、同「近世琉球の王府制度に関する一考察——「おかず書」・「結状」の分析を中心に——」〔沖繩文化研究〕第一五号、

一九八九年）、西里喜行「明清交替期の琉日関係に関する一考察——尚賢・尚質・尚貞の冊封問題とその周辺——」

〔第八回 琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集〕二〇〇七年）、同「明清交替期の琉日関係再考——琉球国王の冊封問題を中心に——」(*International Journal of Okinawa Studies*, Vol.1, No.1, 2010.)、同「咸豊・同治期

（幕末維新时期）の琉日関係再考——尚泰冊封問題とその周辺」（『東洋史研究』六四・四、二〇〇六年）、同「琉球関係史における尚泰の冊封問題（再論）——琉球側の対応を中心に——」（『南島史学』第七九・八〇合併号、二〇一三年）など。

(3) 『旧記雑録追録』巻二二（『鹿児島県史料旧記雑録』追録一、鹿児島県、一九七〇年）。

(4) 『中山世譜』附卷之三。

(5) 一六六七年に隠居を要請した尚質王（一六二九～一六八〇年）に対して、薩摩側は、中城王子（尚貞）への譲位は認められたものの、ひとまず尚貞は名代として政務を執るよう指示している。翌年、尚質が死去したことから尚貞が即位することとなったが、薩摩側は国王の隠居要請を容易には肯んじなかったことが窺われる。

(6) 道光七年八月付、薩摩藩家老から摂政、三司官宛て書

状『旧記雑録追録』巻一六（『鹿児島県史料旧記雑録』追録七、鹿児島県、一九七六年）。

(7) 十一月九日付、薩摩藩家老から摂政、三司官宛て書状『尚育様御即位日記』尚家文書一二五号。以下、尚家文書はすべて那覇市歴史博物館所蔵である。

(8) 『尚育様御元服日記』（尚家文書一一号）。

(9) 言上については、豊見山和行「近世琉球の政治構造について——言上写・僉議・規模帳等を中心に——」（『周縁の文化交渉学シリーズ』六、関西大学文化交渉学教育研究拠点、二〇一二年）を参照した。なお、一般的に琉球では士族層の子弟が元服する場合には、国王からの許可を得ていた。

(10) 『尚育様御元服日記』一一月二日条。

(11) 先王妃への祝文は「先王」の部分「先王妃」となる『尚育様御元服日記』一一月二四日条。なお、祝文については、豊見山和行「祭天儀礼と宗廟祭祀からみた琉球の王権儀礼」（前掲註（2）、「琉球王国の外交と王権」、二三六～二四九頁）を参考にした。

(12) 全文は次の通りである。「維れ、道光七年歲次丁亥十一月二十四日乙丑、中山王灝、恭しく法司官臣の毛執功を遣し、敢えて昭らかに先王各神位に告いで曰く、擇びて五

月十九日において長子育を立てて世子とす。伏して惟だ鑑知す。謹しみて告す。(維、道光七年歲次丁亥十一月二十四日乙丑中山王灝、恭遣法司官臣毛執功敢昭告于先王各神位曰、擇于五月十九日立長子育爲世子。伏惟鑑知。謹告。)(中城王子様、太子様被爲候付、圓覺寺・天王寺江御告祭之御次第)『尚育様御元服日記』。円覺寺では先王へ、天王寺では先王妃への祝文が捧げられた。

(13) 『尚育様御元服日記』十一月二〇日条。

(14) 豊見山和行「近世中期の対薩摩外交」、前掲註(1)「從属的二重朝貢国」琉球の対外関係と貢納制」(『琉球王国の外交と王権』所収)、拙稿「道光二十年代初期の国吉親方の上国——琉球・薩摩の外交交渉の一側面——」(『九州史学』第一六〇号、九州史学会、二〇一一年)。

(15) 前掲註(14)拙稿「道光二十年代初期の国吉親方の上国——琉球・薩摩の外交交渉の一側面——」。

(16) 前掲註(14)の拙稿にも書いたが、上国の免除と琉球の薩摩藩への從属性の低下とは結びつかない。上国免除交渉の内容自体が琉球の從属性を確認するものであり、その後、名代の王子による上国に代替されることになったため、表面的であったとしても琉球の從属性を再構成するという薩摩側の目的はある程度は達成していたものと思われる。

(17) 道光八年二月一九日付「覺」(『尚育様御即位日記』)。

(18) 同右「覺」(『尚育様御即位日記』)、『僉議』道光二八年条(尚家文書四三八号。以下「僉議」は本文書を指す)。

(19) 『僉議』道光二八年条。以下、清朝対策に関する引用などは本史料からである。

(20) 頒封・領封については、金城正篤「頒封論・領封論——冊封をめぐる議論——」(『第三回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』一九九六年)、前掲註(2)西里喜行「明清交替期の中琉日関係に関する一考察——尚賢・尚質・尚貞の冊封問題とその周辺——」を参考にした。

(21) 前掲註(2)西里喜行「中琉関係史における尚泰の冊封問題(再論)——琉球側の対応を中心に——」。

(22) このような琉球国の国家運営に関し、近年渡辺美季氏は「狭間」の論理で理解しようとしている(渡辺美季『近世琉球と中日関係』吉川弘文館、二〇一二年)。日中間に政治外交的な国家関係のない中で琉球国の立ち位置を考える際に有効な捉え方であろう。

(23) 「大清道光八年戊子、因尙灝王染病、世子尙育、攝位」(『中山世譜』卷一二)。

(24) 「道光」八年戊子、尙灝王歸政、世子尙育即位」(『中山世譜』附卷之五)。

- (25) 『中山世譜』卷二二。
- (26) 『中山世譜』卷二二。
- (27) ちなみに、国王就任時に薩摩に提出した文政一一(一八二八)年五月一二日付けの尚育王起請文には「中山王尚育」と見えることから『旧記雜錄追録』卷一六、前掲註(6)『鹿児島県史料旧記雜錄』追録七所収、対日関係における「中山王」は道光八年の段階で成立していた。なお、同時期の対中関係における「中山王」は尚灝であった(例えば『歴代宝案』二一―四七―一)。
- (28) ただし、前述したようにこの「攝位」したという状況も明確に清朝側に報告していない可能性がある。
- (29) 『球陽』の書誌的研究は、田名真之「首里王府の史書編纂をめぐる諸問題——『球陽』を中心に」(『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、一九九二年)を参照にした。
- (30) 『球陽』(尚灝王二五年＝道光八年)。
- (31) 『球陽』(尚育王元年＝道光一五年)。
- (32) 『球陽』(尚育王四年＝道光一八年)。
- (33) 『世譜』の成立過程や『附卷』発刊の意義については、田名真之「史書を編む」(前掲註(29)『沖縄近世史の諸相』所収)などを参照されたい。
- (34) 『琉球関係文書』卷一〇(島津家文書、東京大学史料編纂所蔵)。本史料については、史料中に「元國事執筆史料」と記されていることから窺えるように、明治期以降のいわゆる家中編纂事業の一環として作成された史料であると思われる。
- (35) 道光八年三月四日付「勤言上」(『尚育様御即位日記』)。(36) 全文は次の通りである。「維れ、道光八年歲次戊子三月十有七日丙辰、中山王世子育、恭しく法司官臣の馬德懋を遣し、敢えて昭らかに先王各神位に告いで曰く、育、謹んで擇びて本月十有八日良辰において、祇みて慈命を承け、勉めて王が職を攝す。神鑒を邀えて俯順し、育は衷より、時ごとに和し年ごとに豊かにして、家ごとに給し人ごとに足り、俗はみな仁壽に躋り、よよ共にその昇平なるを享けんことを得せしめんことを冀う。謹みて告ぐ。(維、道光八年歲次戊子三月十有七日丙辰中山王世子育、恭遣法司官臣馬德懋、敢昭告于先王各神位曰、育謹擇本月十有八日良辰、祇承慈命勉攝王職。冀邀神鑒俯順育哀、俾得時和年豐、家給人足、俗咸躋於仁壽、世共享夫昇平。謹告。)(御即位之前日圓覺寺・天王寺御告祭之御次第)『尚育様御即位日記』。
- (37) 「御即位之時御規式之御次第」(『尚育様御即位日記』)。(38) ただし、管見の限り泊土族の事例では「宇姓家譜」の

「五世政恵」項に「尙育王世代、道光十四年甲午八月十二日結歿」とある。この場合、道光一四年の段階ですでに尙育王代と理解していると言える。なお、今回は『那覇市史』（資料篇第一巻七〇九、那覇市、一九八〇～八三年）所収の家譜資料のみを扱った。全ての家譜を収録していないが、おおまかな傾向を把握するには十分であると考ええる。

(39) 同じく本稿では『那覇市史』所収の家譜資料のみを扱った。

(40) 今回は、宮古系家譜は『平良市史』（第三巻資料編一、前近代、平良市教育委員会、一九八一年）、八重山系家譜は『石垣市史』八重山史料四（豊川家文書Ⅲ、石垣市、二〇〇四年）を参考にした。

(41) 「慶應二年二月廿五日評定所達」東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 琉球資料編』（東京国立博物館、二〇〇二年所収）、『大清同治五年丙寅 冠船惣横目方日記 一』（尚家文書一七七号）。なお、あわせて拙稿「近世琉球における冠船と民衆」（『日本歴史』第七六二号、二〇一年）も参照されたい。

(42) 田名真之氏は『家譜』の史料性格について「①公的文書であること。②記録に裏付けとなる資料があること。③編集された文書であること」を指摘している（田名真之

「再び琉球家譜について——首里系家譜を中心に——」前掲註（29）『沖縄近世史の諸相』所収、一六六頁）。

(43) ここではすべて『尙育様御即位日記』に拠る。

(44) 隠居・相続の許可を得るために派遣された使者は義村王子である（『大和江御使者記』尚家文書三二一〇号）。

(45) 道光八年三月二五日付「口上言上」（『尙育様御即位日記』）。

(46) 御礼（ぐりー）とは公式な挨拶の方法で立ったままの挨拶を指す。

(47) 以上、育②の式次第は『尙育様御即位日記』による。

(48) 詳しくは後述するが、尙泰の場合には中城御殿へ参上している（『尙泰様御即位日記』尚家文書二〇、二二号）。尙育の際も本来ならば中城御殿に赴くはずであっただろうが、前述のようにすでに首里城に移住していたことから儀礼の場も変更したものと考えられる。

(49) 「與那原親方被持下候御口上書御披之御次第」（『尙育様御即位日記』）。

(50) 地方役人は沖縄島の間切と伊江・伊平屋・慶良間・粟国・渡名喜といった周辺離島の役人が呼ばれていた。そのほか、宮古・八重山・硫黄島島の役人は儀礼開催時期に沖縄島に渡来している者がいなかったため、不参加としてい

る(道光八年三月一〇日付「覚」『尚育様御即位日記』)。

(51) 道光八年三月一〇日付「覚」(『尚育様御即位日記』)。

(52) 道光八年三月一〇日付「覚」(『尚育様御即位日記』)。

(53) これらの規式内容については、上原ゆかり「首里正月儀礼「朝拝御規式」調査概報」(首里城研究会編『首里城研究』一〇、一九九四年)による。なお、この諸規式は元

日儀礼に酷似していることも指摘しておきたい。正月儀礼に關しては、豊見山和行「祭天儀礼と宗廟儀礼からみた琉球の王権儀礼」、同「史料紹介「琉球王国家年中行事 正月式之内」」(『浦添市立図書館紀要』第二号、一九九〇年)も参考にした。

(54) 「御即位之時御規式之御次第」(『尚育様御即位日記』)。

(55) 道光八年三月一〇日付「覚」(『尚育様御即位日記』)。

(56) 例えば、諸儀礼の準備を行うこと、尚泰即位に伴う役人の位階授与の候補者を推薦することなどがあらかじめ指示されている(『尚泰様御即位日記』二月五日条)。

(57) 「尚泰様御即位日記」三月二五日条。

(58) 池宮正治「琉球国王の神号と『おもろさうし』」(『日本東洋文化論集』一一、琉球大学法文学部、二〇〇五年)、豊見山和行「御後絵からみた琉球王権」(『新しい琉球史像 安良城盛昭先生追悼論集』榕樹社、一九九六年)。

(59) 一月一六日付「謹言上」(『中城王子尚育様御元服日記』)。

(60) 「琉球國要書拔粹」(『石室秘稿』所収)。

(61) 二月二七日付「口上言上」(『尚育様御即位日記』)。

(62) 例えば、道光八年二月二八日付けの東風平親雲上から里主・御物城への指示文書に尚育を指す「上様」と、尚灝を指す「太上様」が登場する(『尚育様御即位日記』)。

(63) 「年中各月日記(道光二十八年)」(『琉球王国評定所文書』第三卷、浦添市教育委員会、一九八九年、四二九頁)。

(64) また、「上使」、「上覧」の使用もある傍ら、「中城王子様」の使用も見られる(『僉議』道光二十八年条)。

(65) 二月一三日付「口上言上」(『尚泰様御即位日記』)。

(66) 「尚泰様御即位日記」三月二六日条。

(67) 「尚育様御即位日記」二月一九日条。

(68) 「僉議」道光二十八年条。

(69) 「僉議」道光二十八年条。

(70) 「御即位之時御規式之次第」(『尚泰様御即位日記』)。

(71) 「年中各月日記」(『琉球王国評定所文書』第二卷、浦添市教育委員会、一九八九年、五一四頁)、「年中各月日記」(『琉球王国評定所文書』第三卷、四二九頁)。

(72) 「年中各月日記」(前掲註(71)『琉球王国評定所文書』

第三卷、四四三頁。

(73) 道光八年二月二七日付「口上言上」(『尚育様御即位日記』)。

(74) 全文は次の通り。「維れ、道光二拾八年歲次戊申五月七日乙丑、中山王世子泰、恭しく法司官臣の向良弼を遣し、敢えて昭らかに先王各神位に告いで曰く、泰、謹んで擇びて本月八日良辰において先父王を繼ぎて從權に即位す。神鑒を邀えて俯順し、泰は衷より、時ごとに和し年ごとに豊かにして、家ごとに給し人ごとに足り、俗はみな仁壽に躋り、よよ共にその昇平なるを享けんことを得せしめんことを冀う。謹みて告ぐ。(維、道光二拾八年歲次戊申五月七日乙丑、中山王世子泰、恭遣法司官臣向良弼、敢昭告于先王各神位曰、泰謹擇本月八日良辰、繼先父王從權即位。冀邀神鑒俯順泰衷、俾得時和年豐、家給人足、俗咸躋於仁壽、世共享夫昇平。謹告。)(『御即位之前日圓覺寺・天王寺御告祭之御次第』『尚泰様御即位日記』)。

近世琉球における王位継承について

麻生

(75) 「御即位之前日圓覺寺・天王寺御告祭之御次第」(『尚泰様御即位日記』)。

(76) 五月六日付「覚」(『尚泰様御即位日記』)。

(77) 「御即位之前日圓覺寺・天王寺御告祭之御次第」(『尚泰様御即位日記』)。

(78) 「長月御タカベ」『琉球国由来記』卷一。

本稿は、二〇一一年に琉球大学で開催された「近代帝王記録の叙述——東アジアにおける 実録 編纂との比較——」研究会で報告した内容を加筆・修正したものである。当該研究会では中見立夫先生をはじめ、多くの方からの示唆を得ることができた。記して感謝したい。なお、本稿は平成二四年度科学研究費(特別研究員奨励費)の研究成果の一部である。

(沖縄県立芸術大学講師)